

「受身形」の指導に関する一考察（1）

－教科書に見られる受身形－

兵庫教育大学 兼重 昇

はじめに

本研究の最終目標は、「良い授業」探求のために、雑多な要素の絡み合った英語授業を、「文法項目」（指導内容）・「指導過程」（指導形態）の視点から分割して、文法項目毎に分かり易い授業の構成を探ることである。すなわち、「特定の文法項目指導に効果的な手順」を提案することを目的とする。ここでいう「良い」とは、「ある文法項目を中心とした言語使用が正しいコンテキストの中で可能になるということ」を意味している。ⁱⁱそして、これらは、『中学校学習指導要領』（平成10年度）で提示されている「実践的コミュニケーション能力の基礎」を構成するものとして考えている。ⁱⁱⁱ

そこで本稿では、その第一段階として、受身形^{iv}の統語的・意味的特徴を概観し、それらが学校教育における中心的教材である中学校教科書において、どのように反映されているかを調査する。その後、取り扱うのに注意しなければならない点、形式教授にとどまらない談話的要素も含めた授業内容について、授業過程における導入に焦点をあてて、実践例を考察する。なお、これらの実践に対する効果・結果はこれからの研究ですすめていく予定である。

1 受身形の捉え方

『中学校学習指導要領』（平成10年度）では、学習内容の文法事項として、「（ケ）受け身のうち現在形及び過去形」を取りあげ、その取り扱いを「（イ）用語や用法の区別などの指導が中心とならないよう配慮し、実際に活用する指導を重視するようにすること」と述べている。他の文法項目^vでは、「理解の段階でとどめること」、という言葉及があることを考慮すると、受身形という文法項目は、スピーキング・リスニングを中心とした実践的コミュニケーションの基礎となるべき項目のひとつであると考えられる。受身形がコミュニケーションの中でどのように使われるかを理解し、しかも実際のコミュニケーションの中で使えることが求められているのである。

2 受身形の特徴

それでは、受身形とは、どのような文法項目であろうか。本節では、その形式的・統語的特徴と意味的特徴を概観してみる。

2-1 形式的・統語的特徴

（1）形式転換による受身形の形成

能動態からの形式転換により受身形が形成されるとする、Chomsky(1957)の受動化規則や Leech and Svartvik(1975)の、『能動態の VP を受動態の VP に置き換える→能動態の目的語を受

動態の主語に置き換える→能動態の主語を受動態の動作主(agent)に置き換える』では、機械的操作により能動態から受動態を形成していった。しかし、これらは受動態・能動態が同じ意味解釈を可能とするものだという点で問題^{vi}があった。また、受動態の過剰生成や過少生成^{vii}という問題も含有していた。この後にも Chomsky(1977)「受動文は、文法機能を変えるプロセス(grammatical function changing process): NP movement によって logical object が grammatical subject となり、任意に logical subject が by-phrase として現れるプロセス」や Chomsky(1992)「コピー理論を用いる Minimalist Program」によって受動態の生成を説明しようと試みている。

学校教育(教室)においては、現実に形式変換による受動態形成の概念にもとづいて、「受動態⇔能動態」という書き換え練習が多く行われてきたことは否めない。しかし、前提となっていた能動文と受動文が同じ意味解釈を受けるといふ誤りを考慮すると、こうした形式転換を元にした機械的練習に終始することは、問題があるといえよう。

(2) 受動態の形式的・使用範囲の特徴

Toda(1993)では「態」に注目し、主語の性質、形式、日本語での訳を視点として、能動態との比較対照をしている。

<表 1 : 態比較(adapted from Toda (1993))>

能 動 態	受 動 態
・主語は動詞の表す動作・状態の出发点 (着点是他動詞の場合目的語、自動詞の場合は、前置詞句で示されることが多い)	・主語は動詞の表す動作・状態の着点 主語が被る影響を表す (出发点は前置詞句で示されることが多い)
・be +過去分詞の形式を含まない	・be +過去分詞の形式を含む
・日本語では「～する、～である」となる	・日本語では「～される」となる

これらを鑑みると、受動態の形式的特徴として、「be 動詞+過去分詞」が基本形であり、これに続く「by-agent」は、実際の利用例では受動態の5分の4は agent が付かない^{viii}とされている(村田他 1996) ためオプションとして捉えるほうが妥当であろう。

また、使用域に関しては、能動態と受動態の使用頻度は前者が 10 倍以上も多く、受動態は科学論文やニュースでの客観的・非人称形式ではより頻繁に使用されていることが明らかになっている(村田他 1996)。

2-2 受動態の意味的特徴

上述のような形式的特徴・使用頻度及び領域は、意味的特徴と密接な相関関係にあるため、形式的な be+ 過去分詞 (+by-agent) を覚えるだけでなく、どのような状況(コンテキスト)で、どのような意味として利用されるのかを十分に理解しておく必要がある。

Quirk et.al(1985)や村田他(1996)では、受動態を選択する際の条件を、各要素・語(句)ごとの意味との関わりと語や文レベルを超えたコンテキストから説明している。

①動詞・動詞＋前置詞の意味による受動態選択

- ・受動態となり得ないもの：fit, resemble, lack, have
- ・受動態になりうるもの：be said to, be reputed to
- ・同じ動詞でも目的語に伴う意味の相違によって、受動態選択が変わるもの

The engineers went very carefully into {○the problem.○the tunnel.}

⇒ {○The problem ?*The tunnel} was very carefully gone into by the engineers.

(○：文生成が可能なもの ?：文生成が不明確なもの *：文生成が不可能なもの(非文))

②目的語(主語)による受動態選択

- ・名詞句：相互変換は容易
- ・目的語としての節：

ア Finite Clause

John thought that she was attractive.

⇒?* That she was attractive was thought (by John).

イ Non-finite clause

(ア) Infinitive

John hoped to meet her. ⇒?* To meet her was hoped (by John).

(イ) Participle

John enjoyed seeing her. ⇒?* Seeing her was enjoyed (by John).

③文脈による受動態選択

談話の原則(主題と題述)(田鍋,1984, Jespersen, 1924, Halliday and Hasan 1976)

「談話のはじめの位置は、話し手が何について話すかを示す重要な位置であり、文のはじめに主題(theme)をおく。」

この「文脈からの受動態選択への制限」は水口他(1994)でも、指摘されている。

「受動文とは何らかの主題についての叙述であり、その主題になるに足るものしか受動文の主語の位置に現れることができない。初出の不定名詞句が受動文の主語になりにくいのは、初めてのものに対して何らかの叙述をするのが、人間の認識上難しいからであると考えられる。」

例) The Prime Minister stepped off the plane.

a. She was immediately buffeted by the wind.

b. #The wind immediately buffeted her. (Brown and Yule 1983)

(#:文脈的に不的確)

また、英語は、情報構造上旧情報から提示し新情報は文末に置くタイプの言語であるため、ふつう受動文の主語には不定名詞句は現れない。すなわち、受動態とは、機能的に見るならば、ふつうは文の主語にならないようなものを主語の位置に引き上げて談話の主題を維持する一つの方法であるといえよう。同時に、受動文は動作主の非焦点化という消極的な機能ばかりでなく、談話の主題を作るという積極的な機能も持っているとして解釈することが可能なのである。

以上をまとめると、発表年代は前後するものの、山川(1994)の指摘した理論的プロトタイプ、心理的プロトタイプという2点をもって提示した英語の受身形プロトタイプが非常に参考になる。このプロトタイプによって、英語における受身形の特徴及び生成が、ほぼ説明できよう。

理論的プロトタイプ

形態：be+V-ed (by-)

機能：(1)agent defocusing(2)旧情報-新情報構造の保持(談話中の主題の生成)

心理的プロトタイプ

Patient-Agent という意味役割の構造を持ち、両方が生物(animate)で agent から patient への動作が明白に伝わるもの。焦点は patient にある。

山川(1994)

3 教科書にみられる受身形

本節では、7種類の中学校教科書で現れている受身形の特徴を調査・考察していく。特に前述の特徴をうまく反映しているかを確認するために、①文脈の中で利用されているか②利用されている動詞について③by-agentの有無、また指導及び活動に焦点をあてている。^{ix}

表2から、7種類中5種類の教科書で70%以上の受身形は文脈中で利用されていることがわかる。文脈中での利用が40%程度であった *New Crown* では、機械的練習が相対的に多く見られ、文単位での受身形（特に、機械的態変換や置換練習）が多くを占めていた。

by-agentの利用は20%~30%程度が一般的で、実際には本文中よりも練習で多く使われている。これは、実際利用とほぼ一致する。

また、受身形で利用されている動詞は、中学校という学習者のレベルにもよるが、write, speak, build, make, invite といった動詞が特徴的に多く使われている。

以上の結果を見ると、教科書中での受身形は実際利用に近いものが多いといえる。しかし、各教科書、まとめのセクションにある文法説明では、能動態との形式的比較及び日本語訳（意味的説明として）にとどまっておき、Context を意識させた談話的要素を取り入れた説明はなされていない (Appendix)。もちろん、ティーチャーズ・マニュアル等の教師参考書を分析対象から除いているため、授業での扱いについては直接的には把握できないが、学習者・生徒に最も近接した教科書での説明不足は、補うべき内容であろう。

<表2：中学校教科書における受身形（表内の数字は文の数）>

教科書・初出箇所・本文内容	総数	練習	文脈中で利用	利用されている動詞	by-agent 有
<i>New Horizon English Course</i> ・Book 3;Unit 4 ・「パーティへの招待状」	34	13	26 (76.5%)	write, mail, take, stamp, send, deliver, read, like use, see, celebrate, invite, hire, make, love, cut down, injure, wash away	9 (26.5%)
<i>One World English Course</i> ・Book 2;Lesson 4・2 ・「自由の女神の由来」	56	12	45 (80.4%)	make, give, speak write, plant, introduce, save, play, destroy, like, visit, take, send, use, invent, lose, close, build	7 (12.5%)
<i>New Crown English Series</i> ・Book 2;Lesson11 ・言語使用について	47	23	19 (40.4%)	speak, use, write, govern, knock out of, give, play, punish, shoot, kill, use, build, select, pick up, like, visit, make	7 (14.9%)

<i>Columbus English Course</i> ・Book 2:Unit 10 ・ロンドン案内	22	8	17 (77.3%)	build, keep, hold, write, open, invite, make, hit, ban, pit, read, promote, get lost	5 (22.7%)
<i>Total English</i> ・Book2:Lesson 10・B ・日本映画について	35	11	20 (57.1%)	write, make, see, translate, understand, speak, teach, do, name, send, decide, give, rename, rescue, pull over, take away	12 (34.3%)
<i>Sunshine English Course</i> ・Book3:Program 4 ・異文化	21	6	15 (71.4%)	introduce, use, play, need, bring, understand, influence, call, see, welcome, love, send,	4 (19.0%)
<i>Everyday English</i> ・Book2:Lesson 4 ・London からの手紙	37	13	28 (75.7%)	take, keep, publish, cause, protect, catch, send, write, put, build, name, love, give, ring, visit, use, find, close, kill	7 (18.9%)

4 指導の実際例

授業を構成する指導過程として、垣田(1978)はいくつかの例を挙げているが、統合すると大まかに以下のようにまとめられる。

①warm-up ②復習 ③導入 ④理解・練習 ⑤定着・展開 ⑥まとめ

これらは、お互いに相補的であり、明確な区分ができないことは周知のことであるが、授業を構成していく上での目安であると解釈できよう。*

本稿では、上の授業過程の中で、特に導入部に焦点を当て、事例をあげて考察する。

< 1 >伊藤他(1976)

(1) (紙飛行機をつくらせて)

PA: I made that plane. (前時の過去形の復習)

P: A made that plane. B made that plane. (いくつかの飛行機を見せて)

T: This plane was made by A. This plane was made by B.

P: That plane was made by A. (教師が見せるにつれて)

That plane was made by B. That plane was made by C.

(2) (Aのグローブを見せて)

T: This is a glove. This is A's glove. A plays baseball very well. A uses glove.

This glove is used by A.

P: (コーラスで) That glove is used by A.

T: (グローブを見せて) Whose glove is this?

P: It's A's.

T: Is this glove used by A?

P: Yes, it is. It is used by A. ...

T: (by の省略の場合、食料品店と、本屋の絵をみせて)

They are stores. They sell apples at this store. Apples are sold at this store.

P: (コーラス) Apples are sold at this(that) store. ...

(練習と点検)

T: 例に倣って「Mrs. Clark によって～された」の表現にして答えなさい。

例) Did you collect the tickets? ⇒No. They were collected by Mrs. Clark.

(3) (地図の日本の部分をさして)

T: We speak Japanese. Japanese is spoken in Japan.

(アメリカをさして)

They speak English in the United States. English is spoken in the United States.

このあと、リピートに続いて国を変えてそれに合う言語を選択、作文させる。

(4) (①テーブル②魚③猫の絵を用意し、まず①②の絵を見せて)

T: Mr. Wilson likes fishing very much. Yesterday he went fishing and caught a big fish. In the evening Mrs. Wilson was going to cook the fish. Just then the telephone rang. She put the fish on the table and went out of the dining room.... (①③のみの絵を見せて) She returned to the dining room. At that time the fish wasn't on the table. There was only a big cat under the table. The fish (と言って生徒を見る)

P: ...

T: What did the cat do? P1: It ate the fish.

T: Good. What did the fish do? P: ...

T: The fish didn't do anything. But it was eaten by the cat.

< 2 > *New Horizon English Course Teachers' Manual*

(1) T: Keiko changed her school this April. I have a letter from Keiko. This letter was written by her. This letter was read by me.

(2) ①猫が前、犬が後ろを走っている様子。横から見る。

②①と同じ状況を後ろから描く。(犬が主体)

③①と同じ状況を前から描く(猫が主体)

①の絵から(1)犬は猫を追いかけた。(2)猫は犬に追いかけられた。の2解釈ができることを確認。それぞれ、②=The dog chased the cat. ③=The cat was chased by the dog.とになることを提示する。

これらの中で、< 1 >の(1)~(3)で挙げられている導入方法は、受身形のもつ本来の意味から導入していないといえる。むしろ、「能動態から受動態」という形式の対比を利用した導入である。これは、第2節で問題として挙げた「受動態と能動態は意味解釈が同じである」という態に対する考え方に基づいている。また、文単位での導入にとどまっているため、文レベルをこえた文構

成への意識が薄くなってしまふ欠点がある。ただ、この著書の出版された時代（1970年代）を鑑みると、一概に批判対象となるべきものではないかもしれないが、実際にまだこうした形式対比を利用した導入が行われているという現状は否定できないだろう。一方(4)においては、次の<2>でもみられるように文脈と視点を意識した実際使用に近い状況を含んだ導入内容である。

<2>の(1)では談話の流れを考慮に入れているが、導入文が文脈中で余剰であると感じられる。(2)の導入では、視点を変え、焦点を変えることで2つの文を生成することができることをしめしている。これは、絵という媒介を利用して、コンテキストを設定しているという点で評価できる。

5 まとめとこれから

本研究の前提は、「英語授業では、ある言語材料（文法項目を含む）を理解し、実践的コミュニケーションの場で利用できる力をつけることを目的としている」ということである。特に本稿では、言語材料として受身形を取り上げ、その言語的特徴（統語的・意味的特徴）と教科書での扱われ方を考察した。実際には、本文で利用されている受身形では談話的要素が盛り込まれているが、まとめや練習といった活動に、談話的要素を取り入れたものが少ないように見える。また、取りあげた事例が古くはあったが、導入段階での受身形の取り扱いに関しては、注意すべき点が浮かび上がったと思われる。

しかし、実際利用されている生のままの言語材料だけが常に導入として最適であるかどうかは、確かではない。導入として必要なものは、時には簡略化し、誇張することも必要である。むしろ、その後の練習活動・まとめの段階での理解がどれほど正確に行われたかに、学習の意味・効果に関わってくるのかもしれない。

これからは、こうした教科書を実際に使っている学校現場において、どのような受身形の学習が行われているのか実態調査分類を行い、それぞれのテクニック・授業アイデア・学習形態によって、学習者の実践的コミュニケーション能力養成にどのような違いが生じてくるのかを調べていく。

註

- i 受身形、受け身（指導要領での表現）、受動態は、本稿ではほぼ同義に捉えている。引用文については引用元の表現を尊重しそのセクションにおいても引用に沿って利用している。
- ii ここでは、「英語教育」を広義の「学習」「人間教育」という概念を含めるのではなく狭義の「言語能力向上」という側面で捉えていく。「人間教育」の役割を含めた学校教育における学習の捉え方については、稲垣・佐藤(1996)などでも取りあげられている。
- iii 実践的コミュニケーション能力と文法との関連については、高島(1995,1999)が参考になる。
- iv 本稿で受身形を取りあげたのは、機械的形式教授の一つである態変換練習の功罪を後に研究対象としていくためである。ただし、本稿では特筆していない。
- v 主語+動詞+whatなどで始まる節、主語+動詞+間接目的語+how(など)to不定詞、関係代名詞のうち、主格のthat, which, who及び目的格のthat, whichの制限的用法の基本的なもの。
- vi Every schoolboy knows one joke at least.
(全ての学童は少なくとも1つのジョークは知っている)
One joke at least is known by every schoolboy.
(全ての学童に知られているある特定のジョークがある。) (村田・成田 1996)
- vii Antartica is uninhabited. *Man uninhabits Antarctica. (Siegel (1976)
This book costs five dollars. *Five dollars are cost by the book. (Jackendoff(1972)))

- viii Jespersen(1924)では、70%-94%が agentless とされている。
- ix 本研究で取りあげた教科書は全て現行の教科書である。上述の平成 10 年度に出された学習指導要領の改訂との関係が直接的ではないが、指導要領改訂によって指導内容が削減された点を考慮に入れると、現行の教科書でも説明・内容が不十分であることを指摘するのには有意味であると思われる。
- x 学習スタイル・学びのスタイルが変換していることも承知しているが、本稿においては従来の授業形式を踏襲したかたちで提案する。

REFERENCES

- Brown, G. and G. Yule. (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge Univ. Press.
- Chomsky, N. (1957) *Syntactic Structures*. The Hague.
- Chomsky, N. (1977) "On Wh-movement." In Culicover, P. et al. (ed) *Formal Syntax*. New York, Academic Press:71-132.
- Halliday, M.A.K. and Hasan R. (1976) *Cohesion in English*. Longman.
- Jackendoff, R. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge. MIT Press
- Jespersen, O. (1924) *The Philosophy of Grammar*. George Allen & Unwin.
- Leech, G. and Jvartvik, J. (1975) *A Communicative Grammar of English*. Longman
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Siegel, D.(1973)"Nonsources of unpassives." In Kimball,P.(ed) *Syntax and Semantics Vol. 2*. Academic Press.:301-317
- Tada, Y.(1993) "Reconsideration of Teaching Passive Voice". *Annual Review of English Language Education in Japan*. Vol. 4 :87-96.
- Widdowson, H.G.(1978) *Teaching Language as Communication*. Oxford Univ. Press.
- 伊藤健三他編(1976)『英語指導法ハンドブック 1 <導入編>』大修館書店
- 稲垣忠彦・佐藤学(1996)『授業研究入門』岩波書店
- 垣田直巳編(1978)『英語指導法ハンドブック 2 <授業類型編>』大修館書店
- 高島英幸編著(1995)『コミュニケーションにつながる文法指導』大修館書店
- 高島英幸(1999)「実践的コミュニケーション能力のためのタスク活動と文法指導—進行形と完了形を中心に— 第 25 回全国英語教育学会北九州大会発表資料
- 水口志乃扶他(1994)「受動態の形式と意味—ヴォイスの統合的研究に向けて—」『国際文化学研究』創刊号 1-32 神戸大学国際文化学部
- 村田勇三郎,成田圭市(1996)『テイクオフ英語学シリーズ②英語の文法』大修館書店
- 文部省(1998)『中学校学習指導要領』
- 山川健一(1993)「文法とプロトタイプ—特に受動態のプロトタイプ構造を中心に—」『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 23:43-53

分析対象とした教科書


- ① *New Horizon English Course* 東京書籍 ② *One World English Course* 教育出版
 ③ *New Crown English Series* 三省堂 ④ *Columbus English Course* 光村図書
 ⑤ *Total English* 秀文出版 ⑥ *Sunshine English Course* 開隆堂
 ⑦ *Everyday English* 中教出版

(1) New Horizon English Course 東京書籍

？

受け身形ってどう使うんですか。

まず、形と意味を確認しておきましょう。形は、
 'am (are, is, was, were) + 過去分詞」です。
 意味は、「～される(された)」。～されている(されて
 いた)」です。
 疑問文、否定文の作り方は、be 動詞が使われるほ
 かの文の場合と同じです。
 by ~ (～によって) が使われることもあります。



③ be + 過去分詞 [受け身形]
 This song is liked by many people.
 (～されている)

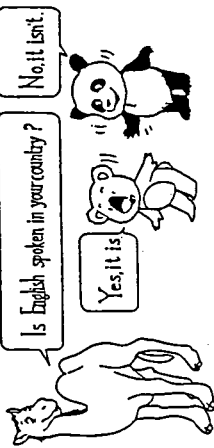
(2) One World English Course 教育出版

2. 「～されます」 受け身の文

Australians speak English.
 English is spoken by Australians.

be 動詞の次の動詞の形は過去分詞とい
 います。

Is English spoken in your country?
 Yes, it is.
 No, it isn't.



This doll was made in Australia.
 These plays were written by Shakespeare.

(3) New Crown English Series 三省堂

LESSON 11

① 「受け身形の文」(p.71)

English is spoken at school.
 (英語は学校で話されています。)

「～されます。～されています」という文は、(am(is, are) +
 過去分詞)を使って作ります。この形を「受け身形」とい
 います。
 「過去分詞形」は動詞が変化した形ですが、次のように2つの
 種類があります。

- ① 規則変化
- | | |
|------|-------|
| 過去形 | 過去分詞形 |
| like | liked |
| use | used |
- ② 不規則変化 (112ページ「不規則動詞活用表」参照)
- | | |
|-------|-------|
| 過去形 | 過去分詞形 |
| speak | spoke |
| write | wrote |
- ④ 次の文の意味をよんでみよう。
 ① Japanese is used in Japan.
 ② The store is opened at noon.

② 「受け身形の疑問文」(p.78)

Is English spoken at school?
 (英語は学校で話されますか。)

— Yes, it is. (はい、話されます。)
 No, it is not (isn't). (いいえ、話されません。)

English is not spoken at school.
 (英語は学校では話されません。)

「受け身形」の疑問文は、「be 動詞」を文の最初に置きます。
 否定文は「be 動詞」のあとにnotを入れます。
 疑問詞が文にたがえてから、()の中の語を使って答えてみ
 よう。

① The store is opened at ten. (Yes)
 ② That book is written in English. (No)
 ③ (by ~)のつく「受け身形」(p.79)

English is spoken by many people in Kenya.
 (英語はケニアでは多くの人が話によって話されています。)

「(だれだれ)に～されています」という文は、動詞の過去
 分詞形に(by ~)を続けます。
 例()にbyを入れて書いてみよう。
 ① This cup is used () Jiro.
 ② These books were written () Soseki.

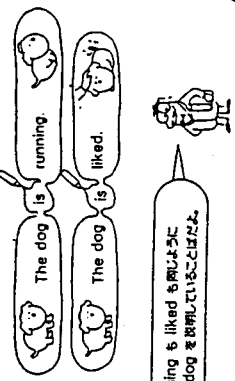
⑤ 受け身形

1) 「～される」

2) 「～している」

The dog is running.
 The dog is liked.

running も liked も同じように
 The dog を説明していることだよ。



(4) Columbus English Course 光村図書

◎受け身「～されます、～されています」

→<be動詞+動詞の過去分詞>を使って表します。

That signboard is written in Japanese.

The house was built last year.

The statue of Cupid was made by Sir Alfred Gilbert.

(5) Total English 秀文出版

【受動態「be動詞+過去分詞」】

■ 受動態

「書く」「見る」「作る」「理解する」というような表現の仕方を「能動態」といい、「書かれる」「見られる」「作られる」「理解される」というような表現の仕方を「受動態」(受け身)といいます。

■ 過去分詞

受動態を表すには、日本語では「～れる」「～られる」という言葉を使いますが、英語では「過去分詞」という形を使います。

1) 規則動詞の過去分詞は、過去形と同じ形です。

2) 不規則動詞の過去分詞は、過去形と同じ形とは限りません。
p.102-103に不規則動詞の活用形の一覧表が載っています。

■ 「～されています」という文は、「be動詞の現在形+過去分詞」で表します。

／例／ ④ English is used by many people.

④ These letters are written in English.

■ 「～されました」「～されています」という文は、「be動詞の過去形+過去分詞」で表します。

／例／ ④ We were invited to dinner.

④ This book was written by Yasunari Kawabata.

☆上の4つの例からわかるように、「be動詞+過去分詞」のもとには、様々な言葉がきます。例えば、④ではby many people(多くの人々によって)、④ではin English(英語で)という言葉が使われています。

■ 否定文・疑問文は次のようになります。

／例／ ④ Japanese isn't spoken here.

④ Are you taught by Mr. Davis?

— Yes, I am. / No, I'm not.

④ My baggage wasn't carried to the door.

④ Was this book written by Yasunari Kawabata?

— Yes, it was. / No, it wasn't.

(6) Sunshine English Course 開隆堂

1. 受け身の文

(a) 受け身の文は [am, are, is, was, were] + 過去分詞) で表す。

Japan was first introduced to Europe in a book.

These words are still used today.

When was English first brought to Japan?

(b) byを用い「～によって」と行為者を表す場合。

Pumpkins were brought to Japan by the Portuguese.

Is John loved by everyone?

(7) Everyday English 中教出版

③ 「～される、～された」「～されている、～されていた」と書くと

受け身 — am, are, is; was, were + 過去分詞

① The bell is rung every hour.

The book was written in easy English.

② Kyoto is visited by many people every year.

③ Japanese is not used in the U.S.

Is English used in Indonesia?

— No, it is not.

動詞には今までに学んできた原形、現在形、過去形、～ing形のほかに、過去分詞という形があります。

